「原子力ムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行
第 3 回業務推進全体会合
逐語録

（木村浩）　それでは、第 3 回の業務推進全体会合を進めていきたいと思います。
まずは資料の確認です。はじめに、議事次第があります（3-1）。次に、業務全体の進捗状況という両面の紙があります。これが 3-1 になります。次が「第 6 回エネルギーと原子力に関するアンケート（首都圏住民）」です（3-2）。「第 7 回エネルギーと原子力に関するアンケート（原子力学会員）」が 3-3 になります。第 2 章成果内容、社会調査の実施と書いてあるものが 3-4 です。次が少しまぎらわしいのですが、「フォーラム参加申込書」が 2 枚あります。Q4 を見てもらったときに、「現在、どちらにお勤めですか」と書いてあるものが首都圏住民用で、3-5 です。Q4 に「代表的なこれまでの経歴は、次のどれにあたりますか」と書いてあるものが原子力学会員用で、3-6 です。「フォーラムへのご協力のお願い」が 3-7 です。最後に、報告書目次案と書いてある資料が 3-8 になります。以上になりますけれども、過不足等ございませんでしょうか。

それでは、議題のほうに入っていきたいと思います。すみません、議事録を確認しようと思っていたのですが、議事録を持ってくるのを忘れてしまいました。メールですでにお送りしていると思いますけれども、前回は 12 月上旬に実施をしました。社会調査の方向性についての議論が中心になって、あとはフォーラムの展開の方法などを議論したということになります。
本日は、社会調査の結果の報告がメインの議題で、あとはフォーラム検討グループ進捗報告とありますけれども、これは時間を見ながらできるところを報告したいと思っております。

1. 議事録確認

（木村浩）　まずは全体の進捗報告をしてから、社会調査グループの話をしたほうがいいと思います。資料 3-1 を見てください。
これは本業務の業務計画書から、今年度実施しますと宣言している部分を抜き出しているものです。斜体が現状を簡単に示しているものということになります。
（1）社会調査の実施。これは再委託先が原子力学会で、土田先生を中心にやっていただいているということになります。「①社会調査項目の作成」に関しては、作成済みということになっております。エネルギーや原子力に関する意識を測定する質問項目の検討、これ

がアンケートという形でまとめられています。フォーラム参加者を決定するための市民および専門家への調査票および依頼状が、資料 3-5～3-7 にあたるということで、一式準備されております。

「②市民および専門家への社会調査の実施・分析」の結果を本日は中心議題にさせてもらおうかと思っています。調査自体は実施済み。首都圏調査が 500 名、学会員調査は 559 名で、回収率 40%弱というところになります。この結果はホームページに公開するということですけれども、現在公開準備中ということです。

「③フォーラム参加者への意識測定項目の作成」は、この資料を作った時点では検討中ということでしたけれども、今日の午前中に社会調査グループのほうでも検討がありまして、ある程度項目が固められたかということになっております。

(2) フォーラムの設計。こちらは東大とパブリック・アウトリーチで合同でやるということになっております。

「①コミュニケーション・フィールドの関連研究整理」は実施済み、これは前回竹中君から報告があった内容ということになります。

「②フォーラムの設計」に関しては、フォーラムの詳細検討は実施済み。この部分に関しては前回紹介をさせていただいております。現在、具体的な準備の一環として、フォーラム計画書（詳細なスケジュール等が記載されている）およびコミュニケーション・マニュアル（参加者のコミュニケーションの手引き）を作成中ということです。こちらはほとんどできあがりつつあるということです。

あとは、フォーラム参加者の決定基準は策定済みということで、その概要がそこに示してあります。首都圏住民は性別、年齢と、原子力に関する意見を中心にまずはパターン化する。学会員は年齢、専門領域で分けるのが妥当だろうということ。あとは、適切にバランスを取ることを重視して、社会調査結果を見ながら、バランスが取れない、もしくは、応募者が十分でないときには、参加者のバランスが取れるように調整を行なうという方針で策定がされているということです。

「③フォーラム参加者の決定」に関しては、ほぼ確定をしているということです。後ほど細かくご報告したいと思いますけれども、現在は、学会員の参加者は確定しました。首都圏住民の参加者は、少し足りなかったということがあって、個別調整ということになっております。

(3) 情報の共有および成果の取りまとめ。これは、今までの議事録とか、業務の目的とか、そういうものはホームページの公開準備中ということです。それから、本日最後に紹介しますけれども、報告書の作成も計画中で、目次案が出ています。また、3 月末には原子力学会の春の年会でシリーズ発表を行なう予定ということになっております。

(4) 外部評価。第 1 回は実施済み、第 2 回は 3 月 11 日に実施する予定であるということです。

ということで、大きな流れとしては、達成率 80%ぐらいはいっているかな、ということ

で、順調に推移していると思います。

それから、2 月いっぱいで再委託先であるところの原子力学会およびパブリック・アウトリーチは業務を終了するということになりますので、その後は取りまとめ、そのフォローを東大が中心になってやっていくことになります。

以上が全体の進捗状況ということですけれども、ここまでで何かございますか。細かい内容につきましては、それぞれのところで詳細に紹介をしていこうかと思っております。よろしいでしょうか。

2. 社会調査グループ進捗報告

（木村浩）　それでは、社会調査グループの進捗報告ということで、こちらは土田先生にお願いしたいと思います。資料は 3-2、3-3、3-4 で、メインは 3-4 になります。

では、この後は、途中で休憩も挟みながら、じっくりと紹介をしていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

（土田）　3-2 と 3-3 は調査票ですが、これは実際にどういう質問がなされたかということの現物ですので、適宜参照しながらご議論ください。

（木村浩）　単純集計の結果は 3-2 と 3-3 にも出ています。

（土田）　3-4 です。3 ページ目に調査票の変更点がまとめられています。何年度にもわたっている中で、継続している項目がどれで、新たに加わった項目がどれかということの一覧表になっております。

4 ページ目、首都圏住民に対する調査。今年の 1 月 5 日から 22 日まで。首都圏 30 キロ圏内に入る町丁から。具体的には表１－２にまとめられています。この中のどこかの町丁ということですが、そこまで入れると個人情報に変わってきますので、市区まででとめてあります。そこから年齢に沿って割り当てて回収して、500 名から回収があったという形になっております。割り当て留め置き法ですが、俗にいうエリアサンプリングという形で、何々町何丁目から何人とってこいというような命令が来て、飛び込んで行って、性、年齢が合う人はいらっしゃいますか、いらっしゃったらお願いをするという形の調査がなされました。

5 ページ目、これが原子力学会員に対する調査になります。郵送調査。調査票を郵送して、返送してもらうという形です。こちらは 1 月 4 日から 2 月 5 日までの時期になされました。実際は 1 月 26 日までになっていますが、少し遅れてくる人もいるので、回収が終わったのが 2 月 5 日になりましたということです。学会員の中から無作為に 1400 名を抽出して、559

票が戻ってきました。

赤字のところは、編集中ということで、今は無視していただいて結構です。

では、早速内容のほうに入りたいと思います。7 ページ目、（1）普段から特に関心を持っている事柄。普段から関心を持っているもの全てに丸をつけてくださいという形で、丸がついた人数のパーセントが載っています。結論から申し上げますと、昨年度福島の事故を受けて、かなり大きく変わりました。今年度は昨年度からほとんど変わりがありません。

例えば、中ほどに「放射性廃棄物問題」という項目があるのですが、福島事故の前はほとんど関心を持たれていなかったのですが、福島事故の後関心が上がりました。これは一過性のものではなくて、1 年経ってもほとんど変化がないという形で、高い関心が保たれたままになっています。今年度は昨年度とほとんど変わりがないというのが見たところかなと思うのですが、何かお気づきの点があれば、ご指摘いただきたいと思います。

午前中に部会を開いたのですが、調査全体の傾向として、基本的に首都圏住民はあまり変化していない。原子力学会員は原子力をやっても大丈夫だという自信を回復しつつある。一言でいえばそういう結果になっています。

では、8 ページに移ります。原子力学会員もほとんど変化はありません。関心が高いものから順にソートして並べてありますので、上のほうにあるものは多くの原子力学会員が関心を持っているものになります。まあ、「雇用」と「老後」だけは並べ方が別なのですが。

7 ページ目と 8 ページ目を突き合せて見てみても、多少のずれはありますけれども、学会員と一般市民の間で、関心の持っているものの違いなども、あるといえばあるのですが、まあこんなものでしょうというところです。

――　すみません、首都圏住民と学会員と普段の認識が違うという今のお話は、どういう結果から来ているのか、もう少しご説明いただきたいですが。

（土田）　いえ、これに関してはあまり差はありません。先ほど申し上げたのは、この調査全体に関してです。後からそういう結果が出てきます。

――　分かりました。そうすると、原子力学会員が自信を回復しつつあるというのは、全体を見てからということですか。

（土田）　そうです。これから徐々に出てきます。

――　図１－１－１の「政治や経済」、「地球温暖化などの環境問題」のところで、2011 年度、2012 年度だけが離れた位置にあるのはなぜですか。

（土田）　これは、ワーディングが違っているのです。昨年度、ワーディングを変えたの

ですね。2010 年度までは「地球温暖化」「環境」という言葉で提示したのですが、昨年度からは「地球温暖化などの環境問題」という形になったので、並べてはあるのですが、まったく同じワーディングではないので、ということです。

―― それで、あえて離してあると。「戦争やテロ」もそうですね。

（土田） そうですね。

（木村浩） 「戦争やテロ」に統合したのです。
「雇用」、「老後」は、抜いたのですね。

―― 項目にカッコがついているのは、何か意味があるのですか。

（土田） 今年度の調査では、抜いてあるということです。過去にはそういう質問をしたけれども、今年度の質問にはない。

（木村浩） 2010 年度までは聞いていましたけれども、ということですね。

（土田） 昨年度も参加された方はご記憶にあると思いますが、福島事故を受けて、（昨年度）この調査を設計するときに、かなり手を入れたので。

―― 「地球温暖化」に関して、ワーディングが変わったとしても、2007 年度からくっつけて見てみると、首都圏住民は単純減少になっているのだけど、学会員は 2011 年度に跳ね上がっているのですよ。傾向が違うなと思って。

（土田） そうですね。10%弱くらいの上がり方ですね。ただ、ここは解釈が難しいのですね。「環境問題」に反応したのかもしれない。あるいは、自分たちの立ち位置を確認するために、原子力は地球温暖化に貢献しているということで関心が高まったともいえます。

―― まあ、いろいろあると思うのですね。ただ、傾向が両者で違うなと思ったので。

（土田） そうですね。違うといえば違うと。
先に進めてよろしいでしょうか。次なのですが、学会員と首都圏住民を比較したものになります。トレンドは違うといえば違う、同じといえば同じなのですが、個々の項目で比較すると、突出しているものが確かにあります。
例えば、一番突出しているのは「科学技術」と「原子力」なのですが、当然といえば当

然なのですが、学会員は高く関心を持っているのに対して、首都圏住民はあまり関心を持っていない。

それを除くと、学会員は「資源やエネルギー」に首都圏住民よりも高く関心を持っています。「政治や経済」にも高い関心を持っています。それから、「原子力施設の事故」に関しても、首都圏住民より高く関心を持っています。

逆に首都圏住民が高く関心を持っているのは、「自然災害」、「病気」、「犯罪」。まあ、「少子高齢化」、それから、しいて言えば「輸入食品」などもあります。

簡単に言いますと、「原子力」は首都圏住民にとってはone of themであって、その他にもっと関心を持っているものがたくさんあるというのが、一般の人たちの本音のところだと思います。それに対して原子力学会員は、当然ながら原子力に関連したところに関心があるという結果になります。

―― ここでひとつ面白かったのですが、原子力学会員は「外交」が首都圏住民に比べて大きいですよね。私は、原子力の情報調査をやっていたことがあって、原子力を調べていくと、どうしても外交の問題に行き着くのですね。原子力という産業の特殊性を考えたときに、そういう傾向があるのではないかという気がするのですね。結局は「不拡散問題」とか。

（土田） そうですね。それから調達問題とか。

―― この表を見て、やはり、という感じがしたのですね。

（土田） 時間の関係もありますので、次に行かせていただきます。（２）特に不安に感じる事柄。11ページが首都圏住民、12ページが学会員なのですが、結論としては、さほど大きな変化はないだろうと思えます。

やはり見やすいのは次の13ページだと思います。今年度の調査で、首都圏住民と学会員との間で比べたものです。首都圏住民の不安が高いのが、「自然災害」もあるのですけれども、やはり「原子力施設の事故」、「放射性廃棄物問題」、「原子力」。それから「遺伝子組み換え食品」など、このようなものに対する不安は、学会員よりも高い。

逆に、学会員が高いのは、おっしゃったとおりで「外交」であるとか、「資源やエネルギー」です。「科学技術」に関してはいろいろ考え方があると思うのですが。不安の対象が違うということが浮き上がってきます。

―― 「遺伝子組み換え食品」については、この調査でいえることではないのですが、私の過去の調査でいうと、若い人よりもお年を召した方に不安が大きいのですね。新技術へのアレルギーというのは、高齢層に高い。

（土田）　首都圏住民が原子力施設等を怖がりすぎているのか、それとも原子力学会員が、専門家だけに、そういうものに対する不安が特に少ないのか。両方の解釈が可能なのですが、事実としては、この辺りに乖離があるということです。

――　図１－１－３と図１－２－３を比べると、「交通事故」は、関心のところでは首都圏住民が学会員の倍だったのですが、不安に関してはほぼ拮抗しています。先ほどは、なぜ「交通事故」がこんなに違うのかなという違和感を感じたのですけれども、不安のところで拮抗しているのを見て、私は安心しました。交通事故みたいなものは、別に原子力学会員だろうとなんだろうと、感じる不安は同じだろうと思っていましたから、図１－２－３にくると非常に合点がいきました。だから図１－１－３でどうしてこんなに違うのかなというのは、少し興味はありますね。

（土田）　これは調査のテクニカルな問題かもしれません。首都圏住民にとって、リストの中で丸をつけやすい。これが、「きゅうりの値段」とか、「洗濯物の乾き方」の中に入っていたら、同じになるかもしれません。

――　身近という意味ですね。

（土田）　身近で丸をつけやすい。まあ、推測の域を出ませんが。

では 14 ページ目です。（３）原子力規制委員会に期待すること。やはり学会員と首都圏住民で違いがあります。首都圏住民の期待が高い項目が上に来ています。「正確なデータの発信」、「事故やトラブル時の分析・評価」、「安全の監視」、それから「長期的な事故対策」、「電力会社に対する指導」。この辺りが、実数としても高いですし、原子力学会員と比べても首都圏住民が強く期待しているものになります。

それに対して、学会員が首都圏住民と比べて強く希望しているのは、「正確なデータに基づく判断」、「中立な第三者機関としての立場」、「適切な規制を作ること」、それから「海外との連携」などになっていきます。少し違います。

午前中話し合ったのですが、おそらく、学会員が規制委員会に求めているのは政治力なのだろうと。「第三者的な機関」であるとか、「規制を作ること」であるとか、「判断する」であるとか、原子力の行政としてまともに動いてほしいと思っている。それに対して、首都圏住民は、「データ」であるとか、「評価」であるとか、「監視」であるとか、原子力そのものの科学的な評価を求めている。学会員は、別に規制委員会に科学的評価を求めていない。そういう違いかなと思います。

文化系的な表現をするなら、首都圏住民は、やはり規制委員会はお上の組織であって、お上がちゃんと安全を確保してくれという形で期待しているのに対して、学会員は、ある

特殊な役割を担った仲間の組織であって、役目を果たせよ、と期待している。そういう気がします。

――　私の印象では、一般の人たちは、今、科学技術、専門家、国、原子力事業者など、今まで権威があったようなところに対する安全神話が崩壊していて、国からの情報とか、そういうものは一切信用しないみたいなところがはっきり出ています。逆に、ここは国だからというよりも、第三者機関に近い印象でデータの信頼性を確保してほしいという思いがあるのではないかと私は思ったのですが。

（土田）　それはあると思うのですけれども、それをなぜ言わなかったかといいますと、それなら首都圏住民ももう少し「第三者機関」という項目に反応してもいいのではないかなと。首都圏住民で高いのは、「監視」してほしい、「評価」してほしい、「指導」してほしいというようなところなので、やはりまだお上なのかな。国は駄目でも、ここはまともに頼れるお上ではないかという意識があるのかなという気がしていました。

――　分かりました。ただ、普段の生活の中では、「中立な第三者機関」という言い方はあまりピンとこないと思うので。

――　私もそんな感じがしました。「中立な第三者機関」という項目は、専門家のほうはよく分かっているから、ここを非常に高く評価している。首都圏住民の方は意味があまり理解できなかった可能性があるのではないか。

――　一度ワークショップなどをやって、いろいろな方のご意見を聞いて、ああ、そういう考え方があるのねと思うと、このキーワードに食いつくのですけど。そんな感じがします。

――　首都圏住民の期待が高い項目は、まさに第三者機関の役割ですから。「第三者機関」の期待が低いのは、私もなぜこんなに低いのかと思いましたが、回答の中身を見ると、やはり第三者機関のことを期待しているのですね。要するに中立的な立場でよく見てよと、一言でいうとそんな感じかなという気がしますけどね。

――　私は、「規制」という言葉に反応しているのではないかと思います。極端に言うと、やめさせるための動きをしてほしい、みたいな。やめさせるための権限があるというような前提で回答しているような気もするのです。

例えば、「原子力推進に対する抑止力」ですね。現実に抑止力になれ、反対せよ、みたいなところがあるのではないか。「電力会社に対して強く指導力を発揮」は、明らかに推進側

の指導力ではないと思うのですね。

（土田）　そうですね。

――　だから、規制という言葉に反応して、原子力発電所を停止させる権限があるのではないのか。明らかに権限があるという前提で受け止められているような感じを受けました。

（土田）　そうですね。そういう誤解のもとで答えている可能性はありますね。

（木村浩）　ただ、「抑止力」に関して、それほど丸はついていないのですね。2 割。まあ、ギャップが大きいところではあります。だから学会員は抑止力ではないでしょうと思っているのだけど、

（土田）　学会の人は、規制を求めたとしても、抑止の方向で規制するなんていうことはまったく考えていないです。

（木村浩）　そういうことです。

――　「正確なデータ」に関してのレスポンスが違うというところですが、「正確な」という言葉の捉え方が違うのではないかと思うのです。
　例えば、首都圏住民は、信頼できる、それでいいんだという「正確さ」を求めている。専門家は、あいまいはあいまいなりに、あいまいなほうが正確なのだという感覚を持っている。「正確」という言葉の捉え方が違う気がします。

（土田）　違う可能性はありますね。
　でも、共通しているのは、情報隠しはしてくれるなとか、そういう思いはこの中に込められていると。

――　そうですね。

――　先ほど、学会員の方が期待するのは政治であって、科学的評価を求めているのではないという話があったのですが、例えば「正確なデータに基づく判断」とかは、そういう政治的なものを求めていると思えるところなのですか。

（土田）　一番的確なのは、「適切な規制を作ること」という項目です。学会員はこれを高く期待している。学術的な判断をしてもらうのではなくて、政治的な枠組みを作ってほし

いと。

――　分かりました。

――　私は、そんなに高級な意味はなくて、単純に今までの規制が不適切だと思っているだけだと思いますが。今までの規制が重箱の隅をつつくようなものだった。だから一般の方が期待しているものとここは明らかに違うと思います。

今までの規制は、本質的な規制をせずに、ワープロミスとか、あるいは検査の非常に瑣末なところの手続きをうるさく言っていた。そういうことではなくて、もっと本質的な安全に直結するようなところをやってもらいたいというのが、専門家の共通した思いなのですね。それがこの高いピークに現れているなと。

一般の方はそういうところはほとんど関心がないというか、情報を持っていないでしょうから、そんなに山が高くない。これは妥当な結果だと思いますけど。

（木村浩）　私の感想としては、首都圏住民が持っている規制のイメージと学会員が持っている規制のイメージのずれが、こういう結果として現れているという感じですね。

学会員は、規制というのは、規制をする枠組みを作って、事業が適切であればちゃんと進んでいけるようにする、そういうためのものとして捉えている。一般の人は、中立的な第三者機関としての規制みたいなものを期待していて、だから当然正確な情報を出してくれるのだろうと思っている。そこにギャップがあるのかなと見ていましたけれども。

（土田）　それでは 16 ページに移ります。（５）原子力発電の関心。これは、他と比べてではなくて、そのまま 5 点尺度で答えてもらっています。

首都圏住民は、事故を受けて急激に関心が上がった。さらに、昨年度に比べても、今年度は、「関心がある」は若干下がっているか誤差の範囲内なのですが、「どちらかといえば関心がある」まで含めると、少し上昇している。このくらいの上昇は誤差の範囲ともいえるのですけれども、事故から 1 年経過して、関心が薄れるという傾向には少なくともない。関心は高いままで続いているということです。

学会員のほうは、関心があるのは当たり前ですから、これはもう天井効果で変化の言いようもありません。

――　去年、革新的エネルギー・環境戦略の意識調査が行なわれていますから、要するに原子力ゼロ政策をあれだけさんざん議論して、連日のように報道された影響があるのではないかなという印象を受けます。

（土田）　17 ページ、（６）原子力発電の利用―廃止の意見。今度は賛否です。

首都圏住民は、昨年度「やめるべき」がドンと上がりました。今年度は「どちらともいえない」が少なくなってきているのですが、このくらいの動きだと誤差の範囲内かなという気がします。だから、変化していないと見るのが妥当ではないかと思います。

学会員のほうですが、このあたりから自信の回復が見て取れます。昨年度に比べて、廃止しなくてもいいという方向に動いています。

―― ずいぶん増えていますね。

（土田） いや、まだまだ。他の質問項目でもっと出てきています。

―― そろそろ本音を言っても大丈夫かなと。今は矢面に立つばかりだからと黙っていたところが、やっと本音を。

―― 本音というか、専門家も自信を失ったと見るべきではないかと。やはりあれだけの事故を起こして、自信が微塵も揺らがないほうが異常なので、やはり一時自信が落ちた。私はそんなふうに見えますけど。

（土田） 私もそう思います。

―― 12 年度は、まだ元のところまでは戻っていないですから、まだへこんでいる人がいるということですね。

―― 昔は、知識が上がってくると賛成意見も上がってくるという構造があったのですが、チェルノブイリのときにこの構造が壊れて、知識人も賛成が下がりっぱなしというのがあったのです。ここで二極化して、本当に戻らない人と戻る人が現れて平べったくなったという経験があります。外国のことと日本のことの違いがあるので、同じかどうかは分かりませんけれども。

（土田） 実は、今から来年度の調査が楽しみで。これがそのまま上昇傾向で上がってくるのか、またより戻しが出るのか。そのまま上昇してくれば、今おっしゃったような形なのだろうと思います。

では、18 ページです。（7）原子力発電の有用－無用の意見。似たような質問なのですが、これもトレンドとしてはまったく同じです。事故を受けて、首都圏住民は、原子力発電は要らないという意見が増えたのですが、1 年経ってもほとんど変化がありません。誤差の範囲です。

それに対して学会員のほうは、事故を受けて要るという意見が揺らいだのですが、つま

り「どちらかといえば有用」が増えたのですが、それが戻ってきています。やはりこれを見ても、自信をなくしたのだと思います。はっきりと「有用だ」という人が昨年度は減ったのですね。ところが、今年度ははっきりと「有用だ」という人が戻ってきている。

次に行きます。（8）原子力発電の安心―不安の意見。不安も、トレンドとしてはまったく同じです。2011 年度に首都圏住民の不安は高まりました。今年度は、微妙なところですが、そのまま高い不安が保たれている。

それに対して、原子力学会員も事故を受けて「安心」が減ったのですが、それが徐々に回復をしてきているということになります。

20 ページ、（9）原子力発電がなくても日本経済は発展できるかどうか、という質問です。これは今年度から入れた質問です。首都圏住民は、原子力発電がなくても大丈夫だという人が 3 割を超えるのですね。それに対して原子力学会員は 6%弱しかいません。それでも、原子力がなくては駄目だという人は、首都圏住民に 2 割強います。それが原子力学会員になると、8 割を超えます。

原子力は要らないと思っている人が 3 割いれば、世論として一定の勢力を持ちます。けれども、要るという人も 4 分の 1 ぐらいいるとなると、やはり世論が二分されます。

―― 政府が、ゼロにしますという非常に明快なメッセージを、革新的エネルギー・環境戦略で出したわけなので、一般的な国民は、あまり難しいことは考えないで、政府がそう言っているのだからそれで大丈夫なのだろうと思うのが自然ですよね。

だから、今度自民党政権になって、次回どうなるかというのが楽しみですね。

（土田） そうですね。自民党が原子力政策を継続すると宣言して勝てたのですから、やはりそれを勝たせてもいいと思うだけの根っこのところはあったのだろうと思うのですね。

―― 個人的には私もそう思いますけれども、データでどのように現れるか。

（土田） いろいろな世論調査が行なわれていますけれども、一般の人の中では原子力反対というのはやはり根強くて。どの調査をやっても、かなりネガティブに出てくるのですけれども、でも、こうやって聞くと、4 分の 1 は賛成している。この 4 分の 1 を多いと見るか少ないと見るか、ですが。

―― この 43.2%の「どちらともいえない」の中に、隠れ賛成派が相当数いるのでしょう。

（土田） ということでしょうね。

―― やはり、ああいうさなかに意思表示は難しいと思いますよ。政府がゼロにしようと

言っているときに、それと違う意見を持つというのは、よほど意識の高い人でないと難しいと思いますから、非常に妥当な傾向のような気がしますけれどもね。

（土田）　これも、また１年経ってどう変わるか興味があります。

――　これは、同じレベルで比較することに意味があるのではないかと思うのです。というのは、一方は原子力学会員ですよね。原子力学会員というと、やはり産業界、もしくは産業に近いところにいる人がおられるわけですよね。

ところが、もう一方の首都圏住民となると、経済なんて関係ない。今日のご飯が食べられればいいみたいなところがあるのではないでしょうか。

（土田）　いや、マクロ経済はどうでもいいかもしれませんが、職を増やしてほしいとか、賃金を上げてほしいというのはあるでしょう。

――　その範囲であって。その違いがあるのではないかという気がするのですよ。

――　アベノミクスにあれだけ世論の支持があつまるということは、経済に無関心とはとても思えませんね。

――　そういう意味ではなくて、いろいろな経済の構造まで思いが至るかどうか、です。

（土田）　まあ、難しいことは分からないけれども、景気をよくしてくれよ、ぐらいのところで判断しているということでしょうか。

次に、21 ページです。ここから先は、原子力に関する意見です。

１）プルトニウムは抽出すべきではない。再処理をやめろということなのですけれども。首都圏住民は、半分くらいがそれに対して「納得できる」と言っています。昨年度より少し増えているのですけれども、誤差の範囲かなと。これは事故を受けてもあまり大きな変化が起きなかった質問です。

当然のことながら、学会員は、再処理大いに結構という形になっています。

先ほども似たような話が出ましたけれども、プルトニウムの抽出がどういう意味を持っているのか、一般の方にはわからなかったという可能性のほうが高い気もします。

――　あまりプルトニウムという言葉が出なかったので。

（土田）　でも、最近ニュースワイドショーなどでも研究しているみたいですから、そろそろ出てくるかもしれない。

――　これは有意差がないと見てよろしいのですか。

（土田）　微妙なところです。でも私は、昨年度と比べて誤差の範囲だと思います。

――　専門家は、事故の話とは直接関係ないと認識しているから、あまり動いていないような気がしますね。

（土田）　首都圏住民もそれほど動いていません。

――　そうですね。これは土田先生がおっしゃったとおり、理解するのが難しい領域なので変化がないという気もしますね。専門家は、分かった上で、事故とは関係ないと思っている。

（土田）　２）原子力発電がなくても、電力は十分に供給できる。首都圏住民は、4割弱の人が供給できると思っています。供給できないという意見は、これも誤差の範囲内なのですけれども、一応増えてはいます。

原子力学会員のほうは間違いなく、原子力がなくては電力はもたないだろうという意見が増えています。

――　この問いかけなのですけれども、今、原子力がなくても電気がもっていますよね。もっているのだけど、今月最高の赤字を出したように、代わりの電気のもとを買っているわけですよね。そういうところにひずみを出している。

原子力学会員は、そういうひずみを出さない前提で、原子力がないと駄目だよと言っているのだと思うのですよ。だけど、首都圏住民は、別に原子力がなかったらガスを買ってくればいいじゃないか、石油を買ってくればいいじゃないか。聞いているものに対する答えが、もとのところでずれている気がするのですけれども。

（土田）　それを込みで、この結果です。おっしゃる通りだと思います。あとで出てきますけれども、首都圏住民は、それでも電気料金を上げちゃ困るといっていますから。

――　固定買取制度が、要するに自分たちが払うんだという意識がなかったものが、やっとその辺が分かってきたと。

（土田）　そう。貿易赤字が拡大しているというようなことが巷で言われるようになってきたら、また変わると思います。

――　まだ固定買取の跳ね返りはほとんどありませんから、そちらの影響は少ないと思いますが、3 兆円の国富の流出については、やはりそういう意識はあったと思います。

それから、興味深いのは、2011 年度に学会員の「どちらかといえば納得できる」と「納得できる」が跳ね上がっていますよね。私自身も含めて、原子力が全部とまったら大変なことになると思っていましたから、よく火力であれだけ支えることができたなというのが偽らざる思いで、そういう思いがここに現れているような気がします。

――　供給に関しては、実際に電力会社がお金を集めるのに仲介するわけですが、その段階で、中小企業が大変いじめられているという実感があるのですよ。

――　いや、そこまで高級な話ではなくて、私が申し上げたのは、これはあまり報道されていませんけれども、電力会社が血のにじむような努力をして、老朽火力発電所を無理やり動かしていた。人間でいったら 70 歳後半から 80 歳というような感じの発電所まで動かして。専門的にいうと、そんなのを動かすなんてとても無理だろうと思うようなところまで動かしていると。よく動いたなというのが正直なところだと思います。

だから 3 兆円の話とか、今おっしゃったような経済的なしわよせをどこにもっていくかとか、そういう話もあるでしょうけど、そこまで情報は一般の方は持っていないし、それから学会員もあまり知りませんから。

2011 年度に、供給できると思う専門家が 2 倍以上に跳ね上がっていますよね。

12 年度により戻しが来ているのは、先ほどご指摘があった話、3 兆円の国富が流出していると。だから、電力は賄えているけれども、これで十分供給できるとはいえないのではないかというところで、より戻しが来ているような気がします。非常に小さい数字の変化だから何ともいえませんけれども。

――　専門家の方はその辺のことがすごく読めるのでより戻しになっているのですが、一般社会ではもっとシンプルに考えていると。だからあまり変わらないという感じがします。

――　そうですね。首都圏住民が変わらなくて、学会員が大きく変化しているというのも興味深い違いですね。

（土田）　では、進まさせていただきます。３）原子力発電は地球温暖化防止に貢献できる。首都圏住民は、事故で変わったといえば変わったのですけれども、それでも 4 割くらいの人たちは、原子力発電が温暖化防止に貢献できると思い続けています。それを否定する意見が、事故を受けて増えたのですが、増えたといっても 2 割くらい。昨年度から今年度に関しては、誤差の範囲、変化なしだろうと思われます。

それに対して原子力学会員のほうは、事故を受けて貢献できるという肯定派が若干減ったのですが、今年度は、事故の前（2010 年度）までに戻りました。1 年で戻りました。

―― 面白いですね。

（土田） だから、温暖化防止に貢献できるという原子力の効能まで否定して反対と言っているわけでもなさそうだと。

―― そうですね。これは首都圏のほうも興味深いし、専門家の落ち込みも興味深いですね。

（土田） 専門家は、今年度はもう、完全に元に戻っています。

―― 逆に、なぜ落ち込んだのかな。

（土田） やはり自信がなくなったのだと思います。

―― これは巷によく言われるように、思考停止状態に陥った人がいるということですよ。

（土田） なるほど。そういう言い方もあるか。

―― 私は、こんなに早く回復したほうが怖いですね。せっかくぼろがたくさん出たのだから、それを全部きちんと改善した上で、元に戻ってほしい。

（土田） 学会員の人たちは、ぼろだと思っていない。

―― 温暖化（の防止に貢献できるという事実）は何も変わりませんから。ここでそこまで議論するのは難しいですね。

（土田） ４）近い将来に原子力発電に代われる発電方法はない。ここは、議論が出るところだと思います。というか、面白いところです。

首都圏住民は「納得できない」という人たちが増えているのです。つまり、新発電を含めて、原子力発電に代われるものがあるだろうと思っている人が増えてきています。

それに対して原子力学会員は、これも揺れ戻しで、やはり原子力以外ないだろうという方向に変わってきています。

変化の方向が完全に食い違っています。

――　首都圏住民で他の発電方法があるのではないかという意見が増えたのは、やはり再生可能エネルギーのいろいろな制度ができて、急激に社会の情報量が増えたし、現実が変わり始めたという情報も増えてきたので、やはりこういう方向でやっていけばどうにかなるのではないかというご意見が増えたのではないかと思うのです。

（土田）　なるほど。

――　私は、先ほど申し上げたことと同じことだと思いますね。政府が原子力ゼロ政策を打ち出しているのだから、できるはずだと。要するに、あまり難しいことを考えたくない人にしてみれば、政府がどう言っているかというのを真っ先に見る。政府ができると言っているのだから、素直にできるのだろうなと思って、増えた。

――　でも、近い将来を考えて回答しているのか。30 年後とか、これから先のことを考えて回答しているのか。そこで違いが出てくるのではないかと思うのですが。

――　これは「近い将来」という言葉が設問に入っていますよ。

――　「近い将来」というのは、どのくらいなのですかね。10 年くらい？

（土田）　それは主観ですけれども。1 年 2 年を考える人もいれば、10 年まで考える人もいるでしょうけれども、ただ、30 年 40 年は近い将来には入らないと思います。

――　そこは大きいですよね。原子力はタイムスケールが長いのですよね。発電所は、話が起きてから 20 年後ですから、10 年といったら近い将来なのですよ。
　ところが、一般の人は、10 年といったらやはりあまり近い将来ではないのですね。その辺りの時間軸の捉え方がだいぶ違うのかなという気はするのですけれども。

（土田）　午前中に木村先生と話したのですけれども、この辺りは、フォーラムで専門家の方と一般の方が話し合うときに、おそらくいい議題になるだろうと。

――　専門家の中でも、この議論をきちんとするのは難しいのですよ。これは非常に難しい問題です。よほど時間をかけないと。私の授業はこういったことを扱っているのですが、半年くらい授業を聞いて、ようやく分かりましたという生徒がたくさんいましたから。これは、要するに人によって言うことが全部違いますから。10 人呼んできたら、10 人とも必ずといっていいくらい違いますから。だから、非常に難しい。

――　ここでは一般市民と原子力専門家を比較していますけれども、この調査に直接関係はないのですが、今、再生可能エネルギーの専門家と称する人がたくさん出てきているのですよね。それとの違いを調べてみるのも面白いのではないかなと。シンポジウムとか、講演会とか、本当にたくさん開かれています。で、たくさんお客さんが来ています。

――　それはもう、ビッグビジネスチャンスですから。

――　そうなのですよ。ただ、それがバラエティになったということは、いいことですよ。

――　孫正義さんを例に挙げるまでもなく。あれだけ大きなお金が動きますから、当然関心をもって、ビジネスとして取り組んでいる。大企業から中小企業までいますから。

――　今、再生可能の専門家が大勢出てきたというお話があったのですけれども、事業者さんが入ってくるだけではなくて、今は自立型の地域を作るという話があって、本当にそれぞれの地域が自治体を巻き込んで、どれだけ自給率を高めるかということを総務省ががんがんやり始めていますから、そういう意味で、行政などもこの分野をやらなければいけないという、非常に大きな変革期、うねりがあるので、とにかくこの分野を勉強しなければいけないという、そういう意味のいろいろな動きは強くあると思います。

――　そうですね。

――　今までやらなさすぎたその反動だと思う。日本は 0.2%とか、0.3%とか、非常に少なかったですから。

（土田）　次も同じような題材です。５）原子力発電の技術開発より、新しいエネルギーの開発と育成に重点をおくべきだ。首都圏住民は、事故を受けて特に、ほとんどの人はそれに賛成だと言っています。昨年度と今年度の差は誤差の範囲だろうと思います。変化なしと見るべきなのだろうと思いますが、しかし数字しては、否定する方向に動いてはいます。

原子力学会員のほうは誤差ではないでしょう。やはり原子力に重点におけばいいという意見が優勢に、つまり元に戻りつつあります。他の質問と共通した変化のパターンだと思います。

６）運転年数の長い原子力発電所が増えて、安全性は低下している。事故を受けて首都圏住民は上がりました。今年度もそのままです。変化なしと見るべきと思います。

原子力学会員のほうも、事故を受けて跳ね上がりました。これも今年度は変化なしとい

うべきかと思います。学会員は、若干「納得できない」、つまり運転年数の長い原子炉でも安全に運転できるという意見が増えているようにも見えますけれども、このくらいであれば、両方とも変化なしとまとめてもいいかなという感じを持っています。

私の持っている他のデータでも、どうも一般の人たちは、原子力発電所が古いとか新しいということがピンと来ないみたいですね。危ないなら、最新式のものでも古いものでも同じように危ない。安全なら同じように安全という感じ方なのだろうと思います。

―― 私の周りには、火力発電所と同じようなおんぼろの発電所になっているのではないか、と言う一般の人がたくさんいますよ。

―― 事故の原因が老朽化だと思っている人は、やはり世の中にはまだたくさんいらっしゃいますね。そういう間違えた報道もたくさん流れて、国会事故調もそれを強く示唆するような報告内容になっていますから。

―― 事故前から、発電所の老朽化の話はずっとあるのですよ。経年劣化するやつはちゃんとやっていくんだといくら専門家が言っても、老朽化は危ないと言うのです。本当は直しながら使っていて、配管などは新しいものに取り替えられているんだよという PR があまり徹底していないせいもあって、おんぼろ火力でだましすかし運転しているような話と同じイメージで思われているのですよ。

―― そう思われているのですよね。私もいろいろなところで解説しましたけれども、福島 1 号機にしても、古いもので残っているものを探すほうが難しいほど新しいものに置き換えているので。圧力容器とか格納容器ぐらいしか残っていないのだけれども、そういうことは一般の人はほとんど知りませんから。40 年前の配管をそのまま使っていると思い込んでいる人がたくさんいますから、これは非常にノーマルな反応だと私は思いますよ。古くなれば危ないと思うのは自然ですから。

ところが、ここで興味深いのは、学会員の「納得できる」が跳ね上がっていますよね。これは老朽化のことではなくて、福島 1 号機のタービン建屋の地下 1 階に非常用電源を置いていたとか、直流電源を置いていたとか、そういう古い設計をそのまま残してあったということに驚きを禁じえなかった専門家がいるということだと思います。専門家の間でも、そういう古い設計をなぜ改めなかったのかという内部での批判もたくさんあって。これは昨年度から今年度にかけて変わっていませんよね。専門家は全然違う観点でそういうことに対する批判があります。

―― それと、もうひとつは事故の前提ですよね。例えば、3.11 が起こる前に、日本の近海でマグニチュード 8.4 以上の地震は起こりえないという報告が、地震学会で提出されたの

ですね。ところが実際はマグニチュード 9.0 が起こった。津波についても、福島は 6 メーターくらいという予測だったけど、実際は 10 メーターを超えた。そういう前提の見直しを含めて、古いものは大丈夫かという疑問が専門家の間では起こっているのではないか。

（木村浩）　着目すべきは、専門家がなぜこの項目について自信を回復させていないのか、ですよ。

――　これは、事実が次々に明らかになればなるほど、あんな馬鹿な設計を変えなかったのはけしからんと専門家も思っていますから、これは減りませんよ。来年やってもたぶん減らない。

（木村浩）　設計思想の問題まで見ているということですか。

――　老朽化ではなくて。アメリカであろうと、台湾であろうと、地下にあったものは持ち上げるという改善をしているのに、なぜ福島はそれをやらなかったのかということに対する批判がここに現れていると私は思って、ちょっと安心しました。学会員の「納得できる」は、一般の方と理由は違うと思うけど、高くて、しかも減っていない。それは自信を失ったのではなくて、事実を見ているのだと私は思う。

――　私もそれは思います。学会員といっても、そういう安全性のところに従事している人は本当に一握りで、核物理であったり、サイクルであったり、そういう人も皆学会員に含まれていますから、あの事故を見て、系統図を見て、こういうことなのかと勉強して納得した人が結構いるのではないかと思っています。そこを知った人が、「納得できる」をかさ上げしているのではないかと思います。

（土田）　では、27 ページです。 7）安全確保に対する意識や努力を信頼している。事故を受けて、首都圏住民の信頼はがくんと減りました。面白いことに、1 年経って、なお減っています。首都圏住民の信頼は、回復しているどころか、ますます減っている。
　学会員のほうも、事故を受けて信頼が少し減ったのですが、これは回復傾向にあります。

――　2011 年度と 2012 年度の間に、一般の人が（信頼を）回復するような動きが、専門家から目立ったものが起きていないということですね。それは非常によく分かります。規制委員会もできたのも、時期的には比較的後ですから。

――　ムラの人は動けない。ムラの人と決めつけられて、どんな発言をしても取り上げてもらえない。それから、プレスも寄ってこない。いろいろあると思います。

――　福島の除染などを見ていましても、まあ直接言えば東電なのですけれども、信頼がどんどん落ちているのですね。はじめは、事故を起こして、あいつらはなんだと言っていたけれども、助けに来てくれるだろう、しっかりした復旧作業を東電が中心になってやってくれるだろうと思っていたのに、1年経ってもやってくれない。

――　除染の話はそうだけど、ここは、安全確保の意識や努力だから。

――　そういう感覚があって、あの人たちは原子力の安全確保をちゃんと考えていないのではないかと。それが反映しているのではないかという気がするのですよ。

――　この 1 年くらい、事故調査委員会の報告書のニュースなどが出ていて、そういうものが出るたびに、現場の意思疎通がうまくいっていなかったとか、いろいろなことがあったりということが情報として出てきているので、そういう意味で信頼を回復できるような情報がほとんどなかったという印象があるのではないかと思います。

――　同感です。

（木村浩）　あと、私は個人的にエネ庁の広報とつきあいがあるのですけれども、今後どうしたらいいですかという相談を受けたりします。エネ庁の人が、まだ広報はやめておけと言われているのですけど、どうしましょうかと言っていました。やらないと信頼はどん底まで行きますと私は言っているのですけれども。広報自体に対して、内部的にどこかからストップがかかっている。そんな状況じゃ世間には何も情報がいかないですから、回復しようがないですよね。

――　マスコミの話を聞くと、ちゃんとやっているというのは絶対に記事にならないのですよね。

――　だけど、専門家のほうからの逆襲というわけじゃないけれども、その後反省して、頑張っていますから、国民の皆様、安心してくださいみたいな話もあまり目立って出てきているわけでもないので。まだ。

（木村浩）　目立って出ていないし、出すのはまずいと思っている人もいるみたいです。

――　学会が、学会事故調というものを立ち上げて、今、鋭意作業しています。この 3 月の終わりに中間報告をして、年末に最終報告が出ますけれども、少しずつ専門家からのそ

ういうメッセージが発信されていかないと。
　確かに政府事故調は安全神話の話を言い、国会事故調はとりこになっていたと言い、民間事故調は深層防護がなっていなかったと言い、どれもこれも専門家に対する厳しいご叱責ばかりなので、当たり前だけど、そういうものを見聞きするにつれ、ますます傾向が傾いていくのは、これまでは仕方がなかったのだろうなと。

――　もうひとつ私が思うのは、専門家は例えばいろいろな新聞記事を読んでも、発電所でもっと津波の対策、フィルターベントをつけて、放出の割合を欧米並みに下げるとか、非常用の設備をもっと改善するとか、その辺のことがなんとなく分かって回答しているのですけど。
　一般の人は、今のままで再稼動をやるの？　冗談じゃない、と思っている。ニーズにかられて再稼動と結びつけて考えていると思うのですよね。今のままでは、ますます反対意見が増えていくと思うのですよね。

――　まだ国民は、原子力の安全性が納得できるところまでいっていないというのは、この数字を見ると明らかですね。

――　去年の秋から、活断層の報道ばかりじゃない。

――　そう、活断層騒ぎも拍車をかけていて。

（木村浩）　いや、これは信頼の問題なので。信頼が下がっているというのは結構重症です。今まで、JCO とか東電の事故隠しとか、いろいろな出来事があっても、その年は落ちるけど、翌年はそうはいっても上昇傾向に転じるのですよ。
　これは 2 年後なのですよね。それで下降傾向があるというのは、かなり重症です。そもそも事故自体が長引いているとか、まだ収束もされていないのではないかとか、まだ目に見えるようなところで被害があるというのもあるのですけれども、すごく重症だなと私は思っているのですよ。

――　これまで動いてきた原子炉が実は活断層の上にあったとか、そういう話になると、やはり信頼は下がりますよね。

――　学会員の中で、「納得できない」という層は、安定していますね。

（土田）　そうですね。絶対値は多くはないのですけれども。学会の中には一定数こういう人たちがいるのだろうと思います。

―― 批判を持った人がいるというのは、健全と見たほうがいいのかもしれない。

（土田） 28 ページです。８）再処理でウラン資源を半永久的に発電利用できる。これは科学的知見ですので、学会員は事故があろうと何だろうと動きません。誤差の範囲です。

でも首都圏住民は、事故を受けて、それは嘘だろうと。つまり、こういった命題に関しても、事故を受けると一般の人は嘘だと思うようになるということですね。これは回復していません。どちらも前年度からの変化はないです。

９）高レベル放射性廃棄物の最終処分地を早急に決定すべき。首都圏住民も、早く決定しなければならないという人が、事故を受けて、トレンドとして増えてきています。

それに対して専門家は、そんなに急ぐことはないよみたいな動きを見せているのですが、政策的にいえば、一般の人たちがこんなに早く決めようという機運が高まっているのであれば、今決めなければいつ決めるんだというような時期に来ていると思います。

―― これを見ると、私は非常に不思議な気がしますね。

―― 自分のところに来るのも OK だよ、という話だったら簡単ですけどね。

（木村浩） あとで出てきますけれども、そういう人たちも増えています。

―― 事故があって、なぜ最終処分地を早く決めろよという意見が増えたのか。

（木村浩） これは去年も話題になりましたけれども、除染の廃棄物などと混同しているということがありうる。分けて考えていなくて、何かそういうごみがある。でもその一環として、どうも今まで発電所の中にあったものも全部ごみになるらしいと。それは大きなリスクだから早くどうにかしなければいけないという認識は、インタビューで聞く限り、強くなってきていますね。

―― 私の理解は、発電所に使用済み燃料がたくさん貯まっていて、それが危ないという報道がされている。でも、再処理工場が動いていない。だから発電所に貯まっている。再処理を早く動かさなければいけないという話と、最終処分地を早く決めなければいけないという話にオーバーラップがあるのかなという印象を持っているのだけれども。

（木村浩） 再処理に関しては、なぜ必要なのか、すごく疑問を持っていますよ。

―― 再処理の必要性ということではなくて、

（木村浩）　いや、2 つに関連を見出していないです。

――　その通りだと思いますよ。

――　私も地域でいろいろ話し合いなどをやっていますけど、核燃料サイクルとか再処理に関心を持っている人は、関心がすごく強い人だけです。普通の人はいまひとつで。
　やはり、出たごみを処理していないということそのものに対して、こういう危険をそのままにしておくのは、私たちの世代として責任が取れないということに気づいてきたという、そういうところだと感じます。

――　私も、そういう意識の現われだと思います。つまり、技術的にいうと再処理が遅れているからあそこに滞っているのだけれども、一般の人から見ると、ごみをきちんと処理しないで、あそこに不安定なまま置いているのはなぜ、と。そういう素直な疑問のような気がします。

（土田）　議論を続けてほしいのですけれども、関連しますので、30 ページも見てください。１０）高レベル放射性廃棄物の最終処分地は、当分の間決定できない。首都圏住民は今年度になって、それを否定する意見がぐんと増えています。つまり、決めることができるという意見が増えてきています。

――　これは驚きですね。

（木村浩）　そうなのです。昨年度までは、9）は増えても、１０）は変わらなかったので。できるんじゃないのという人が増えているところが、今年度の変化なのです。

――　皆さん、勉強したのでは。

（木村浩）　東京都ががれきを受け入れる方針を出しつつあるじゃないですか。これは首都圏の調査なので、そういうところで何かあるかもしれない。

――　岩手県から震災がれきは受け入れる予定で。都庁のほうがこれに関しては割と強く、こういう災害のは皆でやらなければいけないということをかなりはっきり決めて、有無を言わさずやっている、みたいなところがあるので。

――　一般の人は、高レベルも低レベルも区別が分からない。とにかく放射性の廃棄物で、

とにかく処分しなければいけないと。「高レベル」と書いてありますけど、実際はそういう感覚で答えているのではないですか。

―― 放射線が少しでも影響しているという範疇が、ひとくくりになってしまっているように思います。ですから、震災がれきも、福島でないところでさえ、事故の後だから放射線が少しあるだろうということのチェックが厳しかったり。放射線が影響しているものというのはひとくくりのイメージの方が、残念ながらまだまだ多い。でも、徐々に情報も増えてきているので、少しずつ分かってきてくださっているかなと思いますが。

―― 昨年度、今年度の傾向は、首都圏も学会員も似ているというのは興味深いですね。

（木村浩） 専門家は、（自信の）回復かもしれない。

（土田） 専門家は、（2011 年度は）あんな事故が起こって、もう一般の人たちはこんなものは絶対受け入れてくれないだろうと思ったのだけれども、そうでもなさそうだと。

―― 学会員は回復で、首都圏住民は過去にないほど高まった。これは私がひそかに期待していたことではありますね。

―― いや、回答の置き方によって、錯覚を起こす可能性はあるのではないですか。ずっと肯定側の選択肢を左に置いて、急に 1 つだけ反対（肯定側の選択肢を右）にすると、そこだけ異常値が出ることがあるのです。

（木村浩） 設問は 2007 年度からまったく一緒ですから、経年の傾向は同じはずなのです。勘違いがあったとしても、今年度だけということはないです。

―― 私が個人的にひそかに抱いていた期待は、不謹慎かもしれませんけれども、放射性物質があれだけ広範囲に広がって、放射性物質を身近に考えなければならない一般の人たちが非常に増えた。首都圏の人も含めて。今まで頭の中でしか考えなかったものが、身近に考えるようになった。そうすると、処分場に対する意識のギャップが縮まってくれる可能性はあるのではないかという、ひそかな私自身の期待感はあったのですけれども。それがひょっとすると現実化しているのかもしれない。

（土田） では次に移らせていただきます。31 ページ。１１）地震国に原子力発電所は危険。これも首都圏住民は昨年度大きく変化して、今年度は変化なし。学会員のほうは回復傾向にあるということです。

この辺で、一度切りますか。

（木村浩）　そうですね。まだ途中ではあるのですけれども、開始から 1 時間半ぐらい経ちましたので、一旦ここで休憩を挟みたいと思います。

（休憩）

（木村浩）　では、時間になりましたので、再開をしたいと思います。

（土田）　それでは 32 ページからです。１２）原子力発電は 20 年の社会や人びとの生活にとって有用である。ご覧の通り、首都圏住民で有用だと思っている人は、1 割強しかいません。これは、震災を受けてガクンと減って、少なくとも戻ってはいないということです。

それに対して、原子力学会員のほうは、震災を受けて少し減ったのですが、回復傾向にあるという形になっています。

33 ページです。ここからは福島第一原子力発電所事故以降の意見についてです。

１）事故は自然災害ではなくて人災だ。ご覧の通り、首都圏住民は 6 割を超える人たちが人災だと思っています。これは傾向としては学会員も同じでして、半数くらいは人災だと思っています。ただ、自然災害だと思う比率は学会員のほうが多い。

他の調査を見ても、やはり人災だという意見は強いです。これはもう解釈のレベルなのですけれども、誰か責任を取ってよという気持ちが強いと、自然災害にしてしまうと誰も責任を取らなくてよくなってしまうので、それはまずいという意識も反映しているのかなという気はします。

――　誰が悪いかまで聞くと、首都圏住民と原子力学会員で分かれるような気がしますね。

（土田）　２）立地地域の住民が避難しなければならないような事態も考慮しなければならない。これは首都圏住民も専門家も、考慮しなければならない、つまりは確率論的に事故は起こるというような考え方が必要だということになるのですが、どちらかといえば、専門家のほうは、強くそう思っている人は少ないということになります。しかし、大勢としては、今後事故は絶対に起きませんなどということを前提にしたような議論というのは、日本では成り立たないということだと思います。

３）今後、原子力発電の安全を確保することは可能であると思う。当然専門家のほうは可能だと考えているのですが、首都圏住民で可能だと思っている人は 2 割強です。首都圏の 4 割近い人たちは、安全確保はできないと思っています。このギャップをどう縮めるかということですね。

４）原子力発電は、人類の未来を危険にさらす。そう思っている原子力学会員はほとん

どいません。けれども、首都圏住民の半分近くは危険にさらすものだと思っています。この辺りが基本的な認識のギャップなのだろうと思います。

５）原子力発電が地球温暖化対策に有効なエネルギー源であることに変わりはない。原子力学会員はほとんど全員が有効だと考えていますが、首都圏住民は 4 割弱ぐらいの人しか有効だという認識をもっていません。逆に、2 割近くの人はあてはまらないという形、つまり、原子力発電をやっても地球温暖化の対策にならないと考えている人が 2 割弱います。

―― 23 ページ（図１－１０－３）とほぼ同じと考えていいのかな。

（土田） そうですね。基本的なところは同じだと思います。

６）原子力発電のリスクは立地地域に偏っており、社会的な公正さを欠く。これは面白くて、首都圏住民の半分くらいの人たちは、やはり地域の偏りがあると思っています。ところが、原子力学会員のほうは、偏っていないという考えをお持ちの方が 3 割程度います。そして、増えています。

（木村浩） 偏っているというか、「偏っていて社会的な公正さを欠く」なので。だから、偏っているけど、社会的には公正ではないか、と思っている人もいるかもしれません。

（土田） ここでの議論はここまでなのですが、学会発表のときには、学会員の中でも分野別に違いがあるのか、年齢別に違いがあるのかくらいの分析はやって、発表したいと思います。

39 ページです。７）日本は今後も原子力発電を推進していかなければならない。当然のことながら、学会員の大部分はその通りだと答えるのですが、首都圏住民で推進していいという意見に賛成する人は 1 割です。半分以上の人はそれを否定しています。

―― これは「推進」という言葉に反応しているのではないですか。「選択肢として必要だと思う」と「推進」はニュアンスが違いますよね。推進とまで言われると、そうは思わないわという、相当厳しい一般の声があると思います。

（木村浩） これは 17 ページの Q6（利用―廃止）、18 ページの Q7（有用―無用）と比較すると、差が明らかですね。有用だという話と、利用するか廃止するかという話と、推進するという話、この 3 つが連動する感じですね。

―― 面白いですね。これは素直な気持ちだと思うけれども。

（土田） 事故の前から消極的賛成ということでしたので、そうでしょうね。

――　あれだけの被害を起こして、いけいけどんどんはないだろうと。

（土田）　そうですね。

次に、これは分析用の質問項目なのですが、８）私は、個人的には原子力発電が嫌いである。首都圏の半分くらいの人はあてはまっています。やはり、一般の半分くらいの人は原子力が嫌いなのです。が、さすがに学会員はそんなことはありません。これはこの程度にしておこうと思います。

今度は被ばくの問題です。９）作業員の被ばくは深刻な問題だ。やはり首都圏住民のほとんどすべてが、作業員の被ばくは深刻だと捉えています。学会員でもやはり過半数の人は深刻だと捉えていますが、積極的に否定する人も２割４分くらいいます。

――　次の質問と関連しているのではないですか。

（土田）　そうです。では、次も行きます。１０）作業員の被ばくが適切に管理されていない。首都圏の人たちは管理されていると思っていません。学会員の 3 割強の人たちは、管理されていると思っています。

――　線量計をつけずに現場に行っていたという報道があるのだから、一般の方は、それはけしからんと思ったのでしょう

――　3σ（シグマ）の端に出るという報道がされたら、他の発電所もすべてそうだというように受け取ると。

福島で作業をしている人たちに、メディアの側が事故直後からずっと取材を適切にしているわけではなくて。ちゃんと取材したらいろいろなケースが出てくると思うのですけれども。どこかの親方に誘われて何だかよく分からないけど福島に来たというような人たちで、被ばくしたんだと訴える人の意見を大きく取り上げている。

私も、名古屋の中日新聞とか、そういうところで反応を見ると、一般の人たちは、「皆こんなに被ばくしているの？」と思っているのです。

（木村浩）　ただ、管理の体制は、いくら 3σだろうとあってはならない話ですよね。その問題と、そうはいいながら管理されている中で被ばくしているというものとは、やはり別の議論です。管理しているところで何か問題があるということは、やはりちゃんと追求していかなければいけないかなと思うのですけれどもね。

（土田）　それもそうだし。イメージの問題でいうと、首都圏の人たちは、原子力という

ものが、少しちゃらんぽらんだというイメージをもたれていることが現れているかなと思いますね。

（木村浩）　放射線に関するところでも似たような設問がありますよね。安全基準の話がこのあと出てくると思いますけど。52 ページと 53 ページです。52 ページは、安全基準が十分に安全なのかどうかが不安。53 ページは、実際に守られているかが不安。これが結構似た結果が出ているなというのが、実は思っているところです。

――　私は放射線管理をやっている人たちとずっと情報交換をしているのですけれども、福島以外の事故を起こしていない発電所の中の管理は、3σもないです。しっかりしすぎるくらい、世界で一番くらいのことをやっています。

事故を起こした後の福島は、一生懸命やったけれども、混乱状況の中でいろいろあったのですよね。それが大きく報道されたがゆえに、どこでもいつでもあんな状態なのかなというように受け取られた気があるなと私は思いますね。

――　いや、そうじゃないと思いますよ。未だに、誰が働いたのかすら追跡ができないというのはまぎれもない事実です。そういうことが行なわれたということに対して、報道も厳しく指摘しているし、一般の人もそれを感じているのではないですか。

十分な管理ができなかった状況は仕方がないとして、線量計も足りなかったという問題もあった。だけど、名前すらまだ分からない人がいるわけですよ。あるいは暴力団が紛れ込んだとか。そういう問題もある。やはりこれは、私は、今言われる 3σの問題ではなくて、世間の厳しいこういう批判に対しては、謙虚に耳を傾けるべきだと思いますね。

――　それは私も思うのです。誰がこういうことをしているんだということは、誰もが事業者だと思うのですけれども、それも半分以上あると思うのですけれども、日本特有の下請構造みたいなものがあって。原子力の現場でなくても、ほとんどの作業現場では、元請から 3 次くらいまであるわけですね。そうすると、いろいろな問題がそこに起きてくるのですけれども、放射線管理に対してはそんなことはいっていられなくて、しっかり末端まで管理しなければいけないのです。その仕組みが弱いといえばその通りです。

ヨーロッパでは、作業者がいろいろな国を渡り歩いても、EU 全体でしっかり管理していくシステムがあるのです。しかも原子力だけではなくて、RI の被ばくでも共通に管理されている。

日本は、学術会議でその議論があっても、それすら進展していない。そういう構造的なものもあるのですけど、そういうことも、これを読んでいる人たちや専門家がそう判断できるようなことも必要なのではないかと思うのですけれどもね。おっしゃることはその通りなのですけれども、どうするのかということです。

――　一般の方は、やはり報道で伝わっていることを基に判断しているわけで、そんな難しい言葉で考えているわけではないですよ。

変な人が紛れ込んでいるとか。

2000 ミリシーベルトですか、の汚染水に長靴で入って被ばくした人、あれも少し過剰な報道をされましたから。私も番組に出ているときに、一緒に出ていた放射線の専門家の人が「髪の毛が抜ける」という話まで過剰に発言して。私はすそを引っ張ったのだけれども、もう話してしまった後でした。そんなことは起こりもしないし、現実大した被ばくでもなかった。だけど、専門家の立場で髪の毛が抜けるまで話をしてしまった。

やはり、一般の人はそういう報道を聞いていて、おっかないと思ったのではないでしょうか。この質問の回答にはそういうものも影響したのだと私は思いますね。

（土田）　時間も限られているので先に進みます。１１）福島県の除染は順調に行われている。首都圏の人たちは、順調だと思っていない人が半分以上います。学会員の中でも、4 割以上の人が、順調に進んでいないと思っているという結果が出ています。

――　私も順調に進んでいないと思っているのですけどね。実は。現場を見て。

――　まあ、事実だから仕方ないですよね。

――　順調とはどういうことか、というのも人によって違いますからね。

（土田）　そうですね。アンケートですから、それは主観でフィルターをかけた上でのものですから。

44 ページですが、１２）自分の地域で被災地瓦礫を受け入れることができない。大きな違いは、首都圏住民は「どちらともいえない」が多数いるということです。学会員は、「どちらともいえない」が受け入れられるよという方向に入っていっているという違いだろうと思います。

（木村浩）　首都圏住民でも、被災地瓦礫は受け入れてもいいという人たちが 5 割近くいると。

――　立派ですね。やはり先ほど木村先生が言われたように、知事がそういう方針を出したことが影響していると思いますね。

（木村浩）　それは過去にもよくある話ですので、それはあるかなと思いますね。

（土田）　１３）ひとつも再稼動すべきではない。やはり首都圏住民は、3 割強の人は「あてはまる」と答えています。ただ、「あてはまらない」と答えている人も 4 分の 1 ぐらいはいます。学会員のほうは、聞かなくてもこの結果は分かっていると思うのですけど。

46 ページです。（１２）20 年後の日本の、発電量の最も多い電源の予測。首都圏の人は「新エネ」が圧倒的に多いです。「原子力」は事故の前は 4 割いたのですが、今は 1 割です。学会員は「火力」です。事故の前は 3 割だったのが、今は 6 割、倍増しています。そこが違うところですね。もうひとつ言えば、学会員の中でも、原子力が 20 年後に主力電源だろうと考えている人は 3 割くらいで、誤差の範囲とは思いますが、縮小傾向ということになっています。

――　学会の方は、全然新エネには期待していないし、現実的に不可能だろうと。

（土田）　技術的にあれで賄えるはずがないだろうというのが、どなたに聞いても同じ答えです。

ではパーセンテージにいきます。まずは（１３）20 年後の新エネルギーの割合です。首都圏住民で一番多いところが「3～5 割」。その次が「1～3 割」ということで、このレンジの中に大部分が入ります。

それに対して専門家のほうは、1 割未満が 6 割。「1～3 割」が 3 割。大部分が 1 割を超えることはないだろうと考えています。

（木村浩）　超えても 3 割は絶対に行かないと。

（土田）　この質問に関しては、一般の人たちが分かっていないという言い方もできるですけれども。

――　まあ仕方がないよね。

――　発電量の規模感というのが、まだなかなかないのだと思います。

――　規模感と同時に、報道ですよね。すぐにドイツが出てくるのですよ。日本でもできるのではないかと。隣にフランスがあるとかは全然報道しないから。

（土田）　同じような質問ですが、（１４）20 年後の原子力による発電の割合です。首都圏の人たちは「1%～1 割」が 2 割で、「1%以下」が 1 割います。「1～3 割」が 3 割。「3～5 割」「5 割以上」を合わせて 2 割くらいはいるのですけれども、そんな感じです。

それに対して原子力学会員の方は、事故前は「3～5 割」が主だったのですが、今は「1～3 割」が主になっています。

―― 首都圏住民で「5 割以上」が 7.8%もいる。これは驚きですね。だって、原子力学会で「5 割以上」と思っている人は 2.1%しかいない。一般の人が 7.8%もいるというのは、驚愕的な数字だと思う。面白いですね。

―― 2 つコメントがあります。政府がやった意見聴取会、パブリックコメント、それと討論型世論調査と、ほぼこれが対比しうる形になる。つまり、政府のやったことに対する現時点での追試験になるという意味で、この発電割合の立脚理由が選択的にクロスでかけられると面白いなと。政府は、安全性、安定供給、温暖化、経済という 4 つのカテゴリーで整理したのですが、それぞれの割合の人がどこを選考しているかというパターンを見ると、「こちらのほうが最新のデータです」ということが言えるというのがひとつ。

もうひとつは、首都圏住民の立脚理由と、原子力学会員の専門ごとの立脚理由で、相当なパターンの差が出てくると思います。これがデータでパターン化されて、後々のフォーラムで見せられると面白いのではないか。おそらくそれが、ムラの人々の意識の構造のひとつの象徴的な絵として見えてくるところなので。

ぜひ立脚理由とのクロスを、その 2 つの理由で、やっていただければと思います。うまく設計していただかなければいけない部分があるのですが、やり方はお任せしますので。参考資料で政府の情報をもってきていますので、あとでお渡しします。以上です。

（土田） ありがとうございます。

49 ページなのですが、（１５）20 年後の日本の電力消費量の予測です。首都圏の人たちは、3 割程度が「現状維持」、2 割ぐらいの人が現状よりもが少ないという形で、過半数の人たちは、今と同じか今より少ないくらいと思っています。逆に、今より増えると思っている人は 2 割強しかいません。

それに対して原子力学会員は、今より増えるという人が半分近くいます。電力の必要量に関しての認識が、そもそも学会員と首都圏住民で違うと。

―― 面白いですね。発展していくと増えるというイメージがありますけれども、現実は人口規模も減ってくるし、システム改革とか、個人の努力とかいろいろありますので、減るのではないかとかありますので。

（土田） 50 ページ以降は放射能・放射線に関することです。１）身のまわりの放射能汚染が心配だ。首都圏の人は「強くあてはまる」という形になります。学会員はそれほどではありません。

これは経年変化なしだろうと思いますが、注意したいのは、首都圏住民で「強くあてはまる」の割合が増えてきています。どこから来たのかというと、「あてはまる」から来ているのだろうと思いますので、そういう意味では、放射能汚染を本当に心配するコアの人たち、信念的に怖がっている人が増えてきているのかな。そういう人たちが生まれてきているのかなという感じはします。

２）子供たちや将来の世代への影響はゼロにしてほしい。これも首都圏住民の心配は、むしろ昨年度よりも増えています。それに対して学会員のほうは減っていますので、ギャップが広がっています。専門家と一般の人の差が広がっているという傾向になっています。

―― 量の問題が、首都圏住民は分かっていないのに対して、専門家はある程度理解がある、という違いではないかと思います。

（土田） そうだと思うのですが、ただ、首都圏住民の人で、やはりゼロにしてほしいという思いは強まっている。仕方がないのだなという意見はなくなってきているだろうと思います。

―― 放射能や放射線に対する意識がやはり高くなってきている。情報に接する機会が増えて、やはりそういうものに対する認識が高まっているのかなと。

（土田） 次に、2 つ続けていきます。３）国で定めた安全基準が不安だ。４）安全基準が守られているか不安だ。

首都圏住民のほうは、基準そのものが不安だという人が大半です。学会員はそうでなくて、今年度になってさらに否定の意見が増えています。

基準が守られているかどうかも同じパターンです。

これらも専門家と一般市民とではまるきり逆の認識になっている項目になります。

―― 安全基準というのはいろいろな安全基準があると思うのですけれども、一般の人に聞きたいのですけど、どんなイメージで安全基準というのを捉えていらっしゃるのか。

（土田） たぶん、20 マイクロシーベルトとかですね。

―― 食品に含まれる何ベクレルとか。

―― 食品の 100 ベクレルのところの関心が高いと思います。

福島県とか、今ホットスポットでもめているようなところは、20 マイクロシーベルトとか、長期的に 1 マイクロシーベルトとか、そういう数字にすごく関心があります。

―― 首都圏住民は、環境放射能というよりも、食品でしょうね。

―― 食品だと思いますけど。

―― それか、測ったときの 0.23 マイクロシーベルト。それですよね。

（土田） これも、なんとなくそう思うというレベルだとは思いますけれども、本当にこれで大丈夫なのかしらという思いは、一般の人たちは強く持っているということだと思います。

５）情報は正確であることが重要だ。これは議論の必要がないと思います。皆そう思っています。

６）情報はわかりやすいことが重要だ。これも議論の余地がないです。皆そう思っています。

７）自ら勉強しなければならないと感じる。勉強しなければいけないとより感じているのは学会員のほうでして。まあ、学会員は勉強好きということなのかもしれません。

―― レベルが違うんじゃないですか。(専門家は) いろいろ一般の人から聞かれたりする。そうすると、どのお父さんも家族から聞かれたら即答できるかというと、そうではないので、勉強しなければいけない。ということなのでしょうね。

（土田） そういうことでしょうね。その通りだと思います。

８）現状の放射能・放射線ならば受け入れる。学会員は、ほとんど全ての人が受け入れると答えています。今年度になって、さらにその割合が高まっています。学会員は、今の放射能レベルというのは安全だと判断しています。しかし、首都圏住民で学会員のような意識を持っている人は、まだ半分にはいっていない。3 分の 1 程度ということです。

（木村浩） 首都圏住民は、「どちらともいえない」がやや増えてきている。「わからない」も入れるとかなり増えていて、判断しづらくなってきたのかなという感じですね。

―― だけど、「あてはまらない」が減ってきているのは、少しほっとするところですね。

（木村浩） でも、「あてはまる」がそれに呼応して増えているわけではなくて、真ん中が増えているのですよね。

（土田） ９）国や専門家に大丈夫だと言ってほしい。これは、数字は同じです。でも、

意味している内容は違うと思います。原子力学会員のほうは、肯定する割合が増えてきています。

―― 大丈夫だと言ってほしい人は、「あてはまらない」よりも「あてはまる」ほうが多いと。2倍くらいいるのですね。

（土田） はい。これは本当に名実共に大丈夫にしてほしいという意味もあるでしょうし、嘘でもいいから大丈夫と言ってねというのも含まれると思います。

―― テレビのインタビューでも、勉強会に出席した主婦の方にインタビューすると、「『自分で考えてほしい』と言われたのだけど、専門家の人に言いきってほしい」という意見をよく耳にしましたね。

（土田） どうしても一般の方は、白黒をはっきりしてもらいたいという思いが強いですから。

では、59 ページです。１０）除染は技術的に不可能だと思う。そう思っている人は首都圏住民で減少してきています。学会員のほうはほとんど変化はありません。これに関しては、動き方が他の質問項目とは違います。

しかし、絶対数で見ると、今でも 4 割強の首都圏住民は、除染できないのではないかと思っている。これが風評被害とか、福島差別に根っこでつながっているといやだなと思うのですが、事実としてはこの結果になりますね。

―― 首都圏の人の「除染」は、「ゼロにする」というイメージを持った方が多いのではないかと思うのですけどね。「不可能だと思う」の程度の差があるのではないでしょうか。

―― 昨年度、この部分について、地元の新聞から厳しく批判されて、物議をかもしたところです。地元の行政からしてみると、専門家に除染が不可能だというようなことを言ってほしくない。住民が戻らなくなってしまう。そういう意味で、原子力学会は、福島県の行政の苦労を理解していないというような批判を受けたところです。

だけど、これは事実ですからね。

（土田） まあ、難しい。学会員は、「あてはまらない」は半数いるのですよ。しかし、4分の１ぐらいは事実としてこのように考えているということです。

（木村浩） 私は、このくらいの回答が冷静なところだと思うのですけれども。

「除染」というものの定義はあるのですか。

――　定量的にはないのですよ。

――　除染そのものは、汚染物をどこかに除くとか、そういうことでしょう。木村先生がおっしゃっているのは、どのくらいに減らすかという数値目標みたいなものでしょう。それはないでしょうね。

――　先ほど、市民はゼロを望んでいるのではないかというお話がありましたけれども、51 ページ（図１－１６－２）に「影響をゼロにしてほしい」という設問がありましたよね。皆ゼロにすることを願っていて、ゼロにするということを考えれば不可能だと思う、と回答したのかな、という感じがするのですけれども。

（木村浩）　ただ、子供たちや将来の影響はゼロがいいのだけれども、自分たちは別にいい、というのが基本的にはセットなのですよ。なので、除染を「ゼロ」と読んでいるのかどうかは、難しい。分からないです。

――　今のお話と同じようなことが実は 51 ページにもいえて、「将来の影響をゼロにしてほしい」というのは、「ゼロ」を願ってここにチェックしているのか、「減らしてほしい」という意味でチェックしているのか。減らすということか、ゼロということか、どちらをこだわっているのかが読めるといいなと思いながら見ていました。

（土田）　はい。しかも、これは主観的な逃げ道があって。「影響は」なので、放射線があっても影響がなければいいという見方もできる。

（木村浩）　インタビューを聞いていると、「ゼロ」というところに力点を持ってはいないですね。「子供たち」、「将来」、こちらに力点があると私は認識しています。

――　分かりました。

（土田）　では次に行かせていただきます。60 ページ、１１）店で販売されている福島県産の食品は安全だと思う。首都圏住民も、3 割 5 分くらいの人は安全だと思ってくれています。けれども、1 割 5 分くらいの人は、安全じゃないと思っている。学会員は、当然のことながら、大多数の人が安全だと思っています。

――　先ほど、首都圏住民は安全基準といわれたら食品のことを想像するのではないかという話があったのですけれども、この 60 ページの結果を見ると、安全基準と言われて、福

島の線量限度を思っている人も結構いるのではないかなと読み取れるのですけれども。

（土田）　無記名のアンケートとはいえ、福島を名指しして、何か不利なことを答えるというのは、少し抵抗があっただろうという、そういうバイアスもかかっているとは思います。

――　だけど、私は個人的には、安全だと言いきれる人が 35%しかいないというのは、驚きですね。

――　特に、「店で販売されている」とわざわざ書いているのに、それしか納得していないというのは、やはりちょっと。もっと信じる状態に移っていかないと、ですよね。

（土田）　だから、現実的には買い控えとかが起きているということでしょうね。

（木村浩）　53 ページの「国で定めた安全基準が実際に守られているのかが不安だ」と、リンクしているのではないですか。そう読めるのですが。

――　そう、53 ページとリンクしているかなという気がしますね。要するに、基準を守っていない可能性もあるから、心配だ。福島のものを買うよりも、関西方面のものを買ったほうがやはり安心できると思っている人がたくさんいると。

（土田）　そうですね。流通が高度になったものですから、関西はおろか、外国のものでもいいわけですから。

――　福島県内の対話集会でも、こういう質問が出ます。スーパーの商品はちゃんとチェックができているのかという質問がすごく多いです。そうすると、市役所の人が冷や汗を書きながら、「やっております」と言って。

――　一時、全数検査ができなかったときに、福島のものは 1 回他所に出すのですよね。茨城県産だ、とか。だから、確実に安全だと分かったものしか売っていなかったのですよね。

――　福島県の中だと、チェックする機械はかなりの数をそろえてきて、ようやくそれができて、体制はできているのに、やはり地域の方はまだまだそこを信じられないと。

――　そう。基準を信頼できるかどうかなのですよね。

（土田）　では 61 ページです。１２）除染作業によって出たものを受け入れてもかまわない。この質問は、今年度初めて入れたものです。首都圏住民は、3 割くらいが受け入れるといってくれているのですが、2 割くらいの人は受け入れられないとはっきり答えています。これも先ほどの食品と同じで、この辺をどうにかしないといけない。食品と同じ議論だと思います。

62 ページ、１３）状況がよくわからない。これも切実で、首都圏住民の半分くらいの人は分からないと言っているし、今年度になってもその数値は変わらない。一般の人たちによく伝えるというようなことは、少なくとも効果は現れていないということです。

63 ページからが原子力ムラ項目です。首都圏住民には「原子力に携わっている人たちをどう思いますか」と聞いています。学会員に対しては、「一般の人たちが、原子力に携わっている人たちをどう見ていると思いますか」という質問になっています。

１）価値観・考え方が一般の人たちとずれている。この回答を見ると、原子力学会員が、自らをそう定義しているのです。確かに首都圏住民の 4 割弱はそう思っているのですが、そんなに多くはないです。これはいろいろな考え方があるのですが、エリート意識の裏返しという穿った見方もあります。自分たちは普通の人とは違う。だから、他の人たちから違っていると思われているだろうという穿った見方もありえますが、まあ、自虐的ではあります。

２）原子力に携わっている人たちに感謝している。一般の人たちはちゃんと感謝しています。でも、学会員はほとんど感謝されていないと思っています。これも自虐的です。

――　これは面白いですね。

（土田）　３）人たちではなく組織に問題があるのだと思う。首都圏の人たちはかなり肯定してくれています。学会員の人たちは、肯定はするのだけど、一般の人たちほどではない。学会員だと、「あてはまらない」も出てきます。しかし、1 人 1 人はいい人なんだけどねというような認識が、おそらく根っこにあるのだろうと思います。

４）原子力に携わっている人たちは権力志向だと思う。これはあまり差はありません。学会員のほうは、自分が権力志向だというのではなくて、一般の人から権力志向だと見られているのだろうな、というのが 4 割を超えるということになります。

５）大変な仕事をしており、苦労をしていると思う。首都圏の人たちは本当にそう思っています。けれども、学会員はそう思ってくれているだろうと思っている人が 3 割に達しません。この辺りは、学会員に対して、どう考えるか聞いてみたいところです。

――　こういう調査は今年初めてのものだから、興味深いですね。

――　産業界にいたものとして言いますと、例えば一般産業は、営業の人は走り回っているわけですよね。ところが、原子力は走り回っても売れるものではないですよね。トップで決めてくるわけですね。決めてきたことをやっていればいいや、みたいな感覚は、他の産業よりは強いと思うのです。だから、そういう意味での苦労は少ないと思うのですね。そういうところがあるのではないかという感じがあります。

（木村浩）　これは、自分たちが苦労していると思うか、という質問ではなくて、苦労していると市民が見ていると思うか、という質問です。

（土田）　６）大企業に所属していて、恵まれていると思う。そう思われているだろうと学会員は思っています。首都圏住民はそれほどでもないです。

――　というか、外から見て、原子力をやっているところは大した大企業ではないと思っているのですよ。

（土田）　かもしれません。

（木村浩）　「恵まれている」とは思っていないのかも。

（土田）　７）自由に意見が述べられないのだろうと思う。首都圏住民で、かなり肯定が出ました。口封じがされているのではないか、まではいっていないのですが、そんなニュアンスの認識はあるみたいです。学会員も、世間からそう見られているのだろうなと、やはりある程度思っている。

――　「自由に意見を述べる」相手について、首都圏住民の人たちは、原子力ムラみたいなところから外部に対して意見を述べるという受け取り方をすると思います。
　原子力学会員の人たちは、この人たちが自分たちの組織から外に向かって自由な意見を述べると思っているのか、組織の中で自由な意見を述べると認識しているのか、そこは非常に大事なのではないですか。

（土田）　そこは分かりません。次の調査でそこを踏み込むかどうかなのですが、今回の調査ではそこはまったく分かりません。

――　なんとなく、先ほどの「組織に問題がある」と似ているような。

――　私はなんとなく思ったのですけど、首都圏住民の人が印象のいい回答を出してくれ

ているのは、もしかして、テレビで現場で一生懸命除染作業をしている人たちを見て、その人のことをイメージしたからではないですか。学会員のような、机上で検討しているような人を対象にしているのではなくて、現場で一生懸命やっていたり、苦労している人を見ているので、それで印象がいい答えが出てきているのではないかと。

―― 私もそんな気がしますね。東京の事務所で安穏としている人のことではなくて、フクシマ 50 みたいに、放射線を浴びながら一生懸命やっている人。

―― そういう人を想像しながら書いたのかもしれない。

（木村浩） インタビューをしてみると、その通りです。実際に現場で働いている人たちはすごい大変だと思うし、感謝している。だから全体としてはそんなにおかしくないのだけど、一部、東京で何かやっている人たちはおかしいよね、という意見はすごく強いです。

―― この前、現場に視察に行きましたけれども、もう全国から千羽鶴とか、激励のメッセージがいたるところに貼ってあって、すごいですね。だから、現場の人たちに対する感謝の気持ちは大きいと思いますね。この感謝は、我々に対してではないですね。

―― だから、学会員は、我々は感謝されていないんだということが分かっているんじゃないですか。

―― そうですね。

（土田） 70 ページに行きます。8）原子力のことは専門家でなければわからないと思う。やはり、首都圏住民の人もそう思っています。学会員も、そう思われているだろうなと思っています。これはギャップなしということでしょう。

9）自分たちだけ利益を得ていると思う。首都圏住民でそう思っている人もいますけど、それほどではないし、否定してくれる人たちもいます。ただ、学会員のほうはやはり自虐傾向で、そう思われているのだろうと思っている人は、4 割います。

１０）原子力に携わっている人たちに好感を持っている。さすがに好感を持っている人はほとんどいませんが、学会員は、「あてはまらない」、つまり好感なんて持ってもらえていないだろうという人が大多数を占めるのです。だから、自分たちは嫌われ者だという思い込みがある。

―― 迷惑施設なんていう言い方を学会員の人がするのだけれども、そういう意識が強すぎますね。首都圏住民の 3 倍もある。

（土田）　はい。強すぎるのです。そんなに嫌われていると思う必要はない。

――　首都圏では、学会の人たちとか、原子力に携わっている人たちの顔が見えない。立地地域だと顔が見えたりするから、もう少し違う結果が出るかもしれませんね。

――　いや、一般市民の問題ではなくて、私が今申し上げたのは、学会員自身が自虐的に嫌われていると思いこんでいるということです。好感を持っているとは思われていないという人が、一般の 3 倍もいると。

――　それは、あまり顔を合わせる機会を持っていないからですよね。

――　これも面白いですね。先ほどの話と共通かもしれません。

（土田）　１１）そもそも原子力は倫理的に問題があると思う。これはそれほど差はありません。それを肯定するのは、どちらも 3 割くらいです。それを多いと見るか、少ないと見るかというのは議論の分かれ目なのですが。しかし、そもそも倫理的に問題があるのだという見方がないわけではないということは言えると思います。

次は、１２）特に印象はない。学会員の半分以上の人が、首都圏住民は原子力に携わっている人に特に印象など持っていないだろうと思っているのですね。それか、面倒くさくなってその他項目に丸をつけたか。これはよく分からないので深堀りしないほうがいいと思います。

75～77 ページは、前年度とほとんど変化がありませんので、飛ばさせていただきます。

78 ページ、（１９）省エネを心がけた生活をしているかどうか、という質問をしています。学会員は、震災前から省エネをしています。首都圏住民は震災の後に省エネをしているということになります。

最後のページですが、（２０）原子力をやめるためであれば、どれくらい電気料金を上げてもいいかという質問です。「上げるべきではない」が首都圏住民の一番多い答えです。せいぜい「3 割まで」です。3 割以上という人は、ほとんどいません。学会員の主流は「原子力発電をやめる必要はない」。ここに集中します。

――　政府の革新的エネルギー・環境戦略が、電気料金が 2 倍になるということになっているという認識もあまりないのではないですか。

（土田）　原子力をやめるかどうかという議論と、電気料金が上がるかどうかの議論は、完全に別の問題だと思われています。

――　ということですね。

――　電力システム改革の場合、あれで電気料金が下がると皆思っているので。それだけだといわゆる競争原理がはたらいて下がるだろうと言われたりしているのがすごく影響していると思います。こういう再生可能エネルギーとか、施設とか、全部を合わせると上がるだろうとは思っていない。やはり、下がると思っている人がすごく多いですね。

（土田）　間違った認識と言えば簡単なのですけど、でもそう思われているということも事実ですので、その辺りもフォーラムの課題かなという気もします。

（木村浩）　省エネのところですけれども、首都圏住民の方は震災後から現在にかけて、前にやっていなかった人が継続してやっていますよね。学会員は、震災後にやった人は、現在はもうやっていないのですね。

（土田）　まあ、そうですね。

（木村浩）　瞬間はやったけど、もうやめたと。きっかけでやったという感じではないのですね。

（土田）　それよりは、電気を使って、原子力を早く動かそうと思ったのかもしれません。

――　前からやっている、というだけじゃないの。

（木村浩）　そう。前からやっている、だけなのです。学会員は、震災がきっかけになって行動変化したかというと、それはない。首都圏住民は、一部はきっかけになっている。

――　いや、震災後にやっていた人は、前からやっている人より、学会員だって増えているでしょう。

（木村浩）　増えたけど、現在やっている人は減っているのですよ。震災前と変わらないレベルまで落ちている。

（土田）　ええと、これはマルチアンサーなのです。ですから、前もやって後もやっていたら、両方に丸をつけるのですね。

――　そうなのだけど、私もこれを回答したから覚えているけれども、上に丸をつけたら、下は丸をつけないのですよ。前からやっているよと（今もやっている）。

（土田）　そうか。技術的な問題でしたね。

――　本当は、どうするべきなのですか。

（土田）　その場合は、全部に丸をつけないといけないのですが。
　テクニック的には、省エネしている期間をすべてを塗りつぶしてくださいとか、そういうことをしなければならなかった。この聞き方だと、1つ丸をつけたらいいだろうと思う人もいるかもしれませんね。
　だから、現在はやっていないという解釈は、やめておいたほうがいいかもしれない。

――　「すべて選んで」とちゃんと書いてありますね。

（土田）　そこは、疲れてきて、読まない人がいると。

――　私も読み飛ばしましたから。

（木村浩）　これは、作ったときは、こうやれば全通り見ることができるといって、これにしたのですよね。

（土田）　したのですけど、この調査票には確かにその問題がありました。

（木村浩）　そうか。調査票が失敗だったかな。

（土田）　その可能性もあるということですね。
　以上です。

（木村浩）　はい。ということで、今日はほとんどこの議題に時間を使いましたが、調査結果を詳細にお話いただきまして、これをもって土田先生には、この部分の報告書をまとめてもらうということになりますので、よろしくお願いします。

3. フォーラム検討グループ進捗報告

（木村浩）　それでは、3 番目の議題、フォーラム検討グループの進捗報告ですが、これは実は、先ほど 3-1 に書いてあった通りです。実際は、資料 3-5～3-7 を用いて応募をかけて、回収をしたということになります。この辺について、簡単に補足をしようと思います。

資料 3-1 の裏面に、「③フォーラム参加者の決定」があります。市民の代表 10 名、専門家の代表 10 名ということで考えておりますけれども、この調査をやってくれた方に申込書を渡して、専門家からは 25 名申し込みがありました。その中には関係者が 1 名いたり、氏名が書いていない方がいたので、その方は無効票ということで、23 名ということになります。その中から、年齢と分野を中心にして、あとは不安かどうかというところで少しばらつきがあったので、その辺りも加味しながら、全体のバランスが取れるように 10 名を選択したということです。

一方で、首都圏住民の参加の応募は 8 名でした。その 8 名を見てみると、基本的には反対という人たちが中心的であったということで、8 名をそのまま採用してプラス 2 名にすると、バランスが取れない。バランスを取って選択するということでしたので、その中から 6 名までを選択して、残り 4 名は年齢と性別を考慮して、バランスを取って追加で応募をするという形を急遽取ろうということになっております。実際には同じ申込書で申し込んでもらいますので、結果としては、参加していただける人が調査票のどこに分布するかということは見ながら分析はできるということで、これでも問題はないでしょうということで、現在、追加の応募を実施するという手続きに入るところです。

ちなみに、首都圏住民で応募してくれた方の属性としては、男性 6 名、女性 2 名でした。男性のほうも、いろいろばらつきを考えて、2 名外しました。1 名追加で応募しているのは若い男性です。やはり若い層からの応募が少ない。学生がいいのではないかということで、今探しているということです。

女性のほうは 2 名しかいなくて、年齢が若い層と上の層が 1 名ずつです。2 人とも、どちらかといえば反対派の方なので、そうでない人たちを探しながら補填しましょうという形になっています。

――　若い女性を補填する？

（木村浩）　若い女性も、補填します。

という形で、フォーラム検討会議のほうは、しっかりとメンバーを選定していこうという形で動いています。

ちなみに学会員のほうですけれども、女性は 2 名応募がありましたので、せっかくですから入っていただきたいと。あとは学会の所属している領域がバランス取れるように、いろいろな分野の人が入るように選択しています。原子力の賛否としては基本的に全員賛成

側で、不安だという人はほとんどいなくて、数名不安という人がいらっしゃいましたので、その方たちから何名かピックアップするというような形で決めております。

なお、決めるときには、個人情報を特定できないようにして、ID で決めるという形で、公正になるようにということは意識してやっているということになります。

また、フォーラムの実際の設計であるとか、そのときに使うマニュアルは整理が進んできています。また、内部で模擬フォーラムも実施してみて、なかなか楽しいですね、みたいな感じにもなりつつありますので、そういうことに関しては、報告書をある程度まとめて、次回、皆さんに共有したいと思っています。

ということで、ぴったり 6 時になりましたが、フォラームに関して何かありますか。時間も押していますので、次回、さらに紹介していきたいと思いますので、よろしくお願いします。

4. その他

（木村浩）　最後に、その他になります。次回、第 4 回の全体会合は、3 月 22 日（金）の 9 時からになります。場所はここだったと思いますが、正式にはメールでまたお送りしますので、そちらのほうを確認してください。日時はもう決まっていますので、よろしくお願いします。

資料 3-8 にありますが、今、報告書を整備していこうと思っています。文科省からはこういう形での報告書の提出は特に義務づけられてはいないのですけれども、せっかくですので皆さんの中で共有しながら、また次年度につなげていきたいと思いますので、こういうものを用意して、皆さんに紹介をして、意見をいただこうと考えていますので、よろしくお願いいたします。

ということで、本日の議題は全て終了ですけれども、何かお気づきの点はございますか。よろしいでしょうか。それでは、本日はこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

以上